

阿賀川直轄改修100周年記念事業
ゆかりの地を訪ねるコース 1

大川ダムと直轄改修
始まりの地を訪ねる



大川ダム
会津若松市大戸町・南会津郡下郷町

- 阿賀川河川事務所・資料展示場
- ▼
- 向羽黒山城跡・本郷せせらぎ公園
- ▼
- 会津西街道(下野街道)・石畳
- ▼
- 大内ダム・揚水発電上池(下郷発電所)
- ▼
- 会津西街道大内宿
- ▼
- 河食奇岩・塔のへつり・昼食
- ▼
- 大川ダム・操作室、資料展示室
- ▼
- 馬越頭首工・直轄改修始まりの地
- ▼
- 阿賀川河川事務所

主催 阿賀川直轄改修100周年記念事業実行委員会
協力 特定非営利活動法人会津阿賀川流域ネットワーク
阿賀川・川の達人の会
(一社)北陸地域づくり協会

見学箇所案内



阿賀川直轄改修100周年記念事業実行委員会

(事務局)
〒965-8567 福島県会津若松市表町2-70
国土交通省北陸地方整備局 阿賀川河川事務所内
TEL 0242-26-6411 FAX 0242-29-2776

(編集)
特定非営利活動法人会津阿賀川流域ネットワーク
TEL 0242-27-2921

令和3年10月24日発行

阿賀川・日橋川・湯川河川改修洪水年表

天文5年(1536)6月、「白髭の水」発生
慶長16年(1611)8月、会津大地震で山崎新湖出現
元和9年(1623)八田野まで八田野堰完成
寛永13年(1636)阿賀川が氾濫し神指城二ノ丸土塁と掘跡が欠損する
天保9年(1836)戸ノ口堰が若松城下まで完成
明治13年(1880)戸ノ口十六橋水門完成
明治15年(1882)安積疏水開削工事完了
明治21年(1888)7月、磐梯山爆発、裏磐梯湖沼群が出現する
大正2年(1913)8月、阿賀川堤防決壊、死者・行方不明13名
大正3年(1914)猪苗代第一発電所運転開始
大正7年(1918)猪苗代第二発電所運転開始
大正10年(1921)2月、内務省阿賀川改修事務所創設
大正10年(1921)から昭和13年(1938)阿賀川狭窄部で3本の水路開削(捷水路)工事が実施される
大正10年(1921)猪苗代第四発電所建設に伴い切立橋が鹿児島本線から運ばれ架けられる
昭和16年(1941)7月、阿賀川、日橋川氾濫
昭和22年(1947)9月、阿賀川、湯川氾濫
昭和31年(1956)宮川放水路完成
昭和33年(1958)9月、会津地方で大水害発生
昭和33年(1958)湯川放水路完成
昭和46年(1971)大川ダム実施計画調査着手
昭和52年(1977)4月、大川ダム本体工事着手
昭和56年(1981)日橋川堤防改修完成
昭和57年(1982)9月、会津地方洪水発生
昭和62年(1987)10月、大川ダム完成
平成14年(2002)7月、床上22戸、床下83戸の水害
平成23年(2011)7月、会津地方西部で豪雨
平成27年(2011)9月、会津地方南部で豪雨
令和元年(2019)10月、会津地方で豪雨、過去2番目の降水量となる
令和3年(2021)12月、阿賀川直轄改修100周年記念式典が開催される



阿賀川とは

阿賀川は、福島県南会津郡南会津町の栃木県境を源流に、会津盆地の中央を流れ、日橋川や只見川の流れを集め、新潟県に入ると阿賀野川に名を変え、新潟市の日本海に流れる流域面積が全国8位の大河です。会津藩では、「揚川」（あががわ）とは本来只見川を差し、日橋川合流すると「揚川」（あがのかわ）と呼んでいました。その呼び名が阿賀川の元になっています。全国10番目の長さ、流域面積は8番目、年間流出量は全国2番目の大河です。

日橋川とは

裏磐梯の桧原湖を始めとする湖沼群の水を集める猪苗代湖の水は、戸ノ口から日橋川に流れ、会津盆地中央で阿賀川と合流します。川の呼び名は、江戸時代までは、流域の地名で呼ぶことが多く、日橋川とは『新編会津風土記』に、磐梯町大寺に「新橋」（にいばし）があり、下流の落合に「新橋」（しんばし）が架けられ、文字が同じだったため混乱したことから、大寺の橋を「日橋」としたので、日橋川と呼ぶようになったとあります。流域には、東京の発展を支えた電力を供給している猪苗代第一発電所から第四発電所のほか、日橋川発電所と金川発電所があり100年を経過しています。

湯川とは

会津若松市の東山町の上流、安藤峠を源流とする川で、東山温泉を通ることから、湯川と呼ばれています。蒲生氏郷が若松に入る以前は、川底が黒かったことから「黒川」、東山の羽黒神社の下を流れることから「羽黒川」と呼ばれ、城下町は「黒川」と呼んでいました。氏郷は、「車川」と「押切川」の二本があり、黒川の元の流れだった「車川」を外堀にし、本流を南だけにして、城下町を「若松」にしました。城下町会津若松を流れる生活に密着した河川として親しまれています。

阿賀川河川事務所の役割

会津盆地を流れる阿賀川、湯川、日橋川を主として、洪水の発生を抑え、安心安全な生活が出来るように堤防などの整備をするとともに、河川の自然再生を進め、貴重な生物の保護、川に親しみを持ってもらい理解してもらう学習の場の提供と河川協力団体との連携があります。豪雨による流量の増加に対しては、流量調節や適切な水の活用を進めるため、大川ダム管理、湯川可動堰の管理、水害発生を防止する身神川排水機場の管理、排水ポンプ車をはじめとする災害対策車の整備があります。

阿賀川河川事務所の歴史

大正10年(1921)2月1日に内務省仙台土木出張所阿賀川改修事務所が設置されます。昭和18年(1943)4月1日に内務省仙台土木出張所阿賀川工事事務所に名称変更され、平成15年(2003)4月1日には、国土交通省北陸地方整備局阿賀川河川事務所に名称変更されています。

出張所等では、

- 大正10年(1921)に真木工場、雨屋工場建設
- 昭和5年(1930)に金上工場建設
- 昭和8年(1933)に大川工場建設
- 昭和18年(1943)に大川工場が神指工場に名称変更し、金上工場が廃止されます
- 昭和23年(1948)に神指工場が神指出張所に名称変更し、金上出張所が設置。真木工場が真木出張所に名称変更されます
- 昭和27年(1952)に真木出張所が廃止
- 昭和32年(1957)に金上出張所が廃止し塩川出張所設置
- 昭和47年(1972)に神指出張所が移転し、北会津出張所に名称変更されます
- 昭和63年(1988)4月11日に大川ダム管理支所設置
- 平成13年(2001)国土交通省北陸地方整備局阿賀川河工事事務所に改称
- 平成15年(2003)北陸地方整備局阿賀川河川事務所に改称

河川協力団体

河川協力団体は、河川法第58条の8第1項の規定により河川協力団体として指定された団体です。阿賀川は、古くから流域住民とのつながりが強く、川の背後地に住む人たちが河川を管理し、川からの恩恵や自然環境の健全な維持に当たっていました。阿賀川流域の歴史・風土・文化・生活を通して水環境を担う阿賀川を理解し、川から学び、河川の管理や川環境の保全や河川活動の指導者育成支援の活動に取り組んでいる次の団体があります。

特定非営利活動法人

会津阿賀川流域ネットワーク

平成16年(2004)4月に福島県から特定非営利活動法人として認証を受けた団体で、水環境の保全ために阿賀川流域住民とともに、阿賀川流域の治水、安全確保、河川管理活動、地域づくり支援の活動をしています。主に、阿賀川、日橋川、湯川流域の堤防除草と点検、川に関する活動をしている団体への助成、水環境に対する広報活動、総合的な学習の支援をしています。

阿賀川・川の達人の会

平成5年(1993)3月に設立した団体です。自然とのふれあいを通じた遊びや生活を体験する機会が減少しています。そこで、川の持つさまざまな機能を生かし、子どもたちや川に親しむ人々に、阿賀川を身近な憩いの場として利用するための術、遊び、文化等を掘り起こす「体験」を通して伝承、伝達していく川の達人を養成することを目的に発足し、活動をしています。活動を通じ、阿賀川を身近に感じてもらい環境教育や治水、川の歴史、洪水、堤防・ダムの防災機能について、子ども達に親んでもらい河川の総合学習の支援をしています。会は「会津めだか塾」の卒業生や講師経験者、川に興味を持つ人で構成され、職種や年齢もさまざまです。



阿賀川河川改修の始まり

古くから阿賀川は洪水との戦いでした。最も激しかった洪水は、阿賀川が会津盆地に入り現在の会津若松市と会津美里町の境界となっていたところを流れていた「鶴沼川」(鶴の首のように曲がっていたことに由来)が、天文5年(1536)の「白髭の水」洪水で現在のように会津美里町本郷から北の湯川村へ流れを変えた会津最大の洪水です。

その後「洪水の歴史年表」にあるように、度々洪水に見舞われています。大正2年(1913)8月27日、台風によって会津地方の堤防288箇所が決壊し、死者・行方不明13名、1006戸が浸水しています。その後、大正時代に阿賀川の流路は、会津若松市大戸町上三寄の馬越頭首工直下において、大戸町の住民によって、河川内の大岩をダイナマイトで爆破し、それまで右岸、東側の大戸町雨屋寄りを流れていた流路が、会津美里町大石寄りに変化しました。大正7年(1918)には、福島県によって阿賀川の改修計画が作成され、翌年には内務省によって喜多方市慶徳町山科地点の改修が始まります。大正10年(1921)には、内務省で喜多方市慶徳町真木の泡の巻橋付近と会津坂下町袋原の捷水路の直轄工事が始まります。また、会津若松市大戸町下雨屋の字村北に雨屋工場が建てられ、上雨屋字余松地内に見張小屋が建てられ除石工事(低水路整備)が始まります。袋原の工事は、昭和13年(1938)に完成し、現在の流路のように約6kmが0.5kmの河道になります。旧河川は今でも残され、川前のヘラブナの釣場としても知られています。

その後、昭和31年(1956)7月梅雨前線による大雨で、阿賀川、湯川、宮川が大氾濫をしています。これを契機として、昭和32年(1957)から支川日橋川の捷水路工事に着手することとなりました。

会津若松市大戸町雨屋 雨屋工場跡



阿賀川の洪水と

向羽黒山城跡

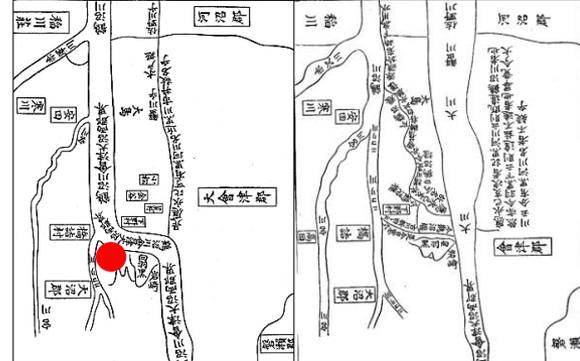
会津盆地南東端に位置する会津美里町本郷の向羽黒山城跡は『会津旧事雑考』によると、天文5年(1536)の「白髭の水」洪水で現在のように会津美里町本郷から北の湯川村へ流れを変えた会津最大の洪水の直後に築かれています。鶴沼川の旧河川の南側に位置しています。

向羽黒山城跡は、永禄11年(1568)に葦名(蘆名)盛氏が会津美里町の岩崎山に築いた山城です。天文5年の流路変更に伴って、『本郷邑向羽黒古壘之図』には、旧河川より南側の部分に、外構えという外堀と土塁と山城の曲輪の土塁が描かれています。また、地名として、その内側に城下町の上町、十日町、本郷町、六日町、三日町など地名があり、町屋が置かれていたこともわかっています。

その後、会津の領主だった伊達政宗は、会津に入るとすぐに、要害と向羽黒に行った記録が『伊達天正日記』に書かれていることから、改修していたことが分かります。また、蒲生氏郷以降に登場する礎石が至る所にあり、二ノ曲輪に入る虎口には石垣が積まれていること、直線的な土塁や堀跡などからも大改修していたことが分かっています。さらに、この城の最後の城主となる上杉景勝・直江兼続によって、大規模な堅堀や幅30間となる堀切なども残されています。神指城を築くのが1600年であり、天正18年(1590)年に会津に入ったことから、会津に入ってから大改修したものと考えられます。その後、1600年の徳川家康による会津討伐命令により、更に手が加えられたと見られますが、戦いには使用されず、上杉氏が米沢に移封となったため破城となっています。



●の位置が、現在の湯陶里の場所になります。黒色が土塁になり、外構え(外堀)の土塁が御用地方面にあることが分かりますが、発掘調査では確認できませんでした。『本郷邑向羽黒古壘之図』個人蔵



天文5年(1536)の白髭の大水『会津旧事雑考』阿賀川が会津美里町や会津坂下町を流れていたものが現在のように北に流れるようになりました。



永禄11年(1568)鶴沼川(阿賀川)の旧河川を利用し、その内側に向羽黒山城の城下町を葦名(蘆名)盛氏が造りました。



昭和31年7月の洪水 湯川の氾濫 会津若松市高野町界沢

大川ダム

大川ダムは、芦ノ牧温泉の南、会津若松市大戸町と南会津郡下郷町にまたがる阿賀川に造られた洪水操作、流水の正常な機能維持、かんがい用水、水道用水、工業用水、揚水式及びダム式発電をする多目的ダムです。大川ダムの上流には多目的ダムは無く、流域面積が大きいため水の流入量が大きいことから、貯水池の若郷湖の大きさは1.9平方kmと広く、総貯水容量は5,750万m³あります。

昭和33年(1958)9月の阿賀川流域の大水害を受けて、昭和46年(1971)に実施計画調査が着手、昭和52年(1977)4月に大川ダム本体工事が始まり、昭和62年(1987)10月にダム本体が完成します。

重力コンクリート及びロックフィルの複合型ダムで、高さ75m、堤頂の長さが406.5m、堤頂の幅が6mあり、若郷湖を下湖として、夜間電力を利用して上湖の大内ダム湖へ揚げ、落差約400mを利用して最大100万kwの発電を電源開発株式会社でしています。また、大川ダム下流右岸においても東北電力株式会社において最大2万1千kwの発電もしています。

令和元年(2019)10月12日の令和元年東日本台風は、ダム完成後最大の流入量毎秒2,405m³を記録しました。大川ダムでは、完成後初めてとなる事前放流を実施し、貯水位を台風襲来までに常時満水位より21m低下させました。結果、ダム下流に流す流量を最大で毎秒834m³低減する洪水調節操作ができました。これにより、馬越観測所(会津若松市大戸)では河川水位を約1.6m低下させる効果があったと推測されます。

また、平成28年(2016)5月から8月の渇水では、81日間下流へ水田や工業用水として補給をし、旱魃対策に貢献しています。

大川ダム



大川ダム



大内ダム



大内宿 南会津郡下郷町



大内宿と石畳

下郷町の大内宿は、下野街道(会津西街道)の宿場として江戸時代には栄えていました。明治15年(1882)の三方道路の建設により、取り残された下野街道沿いの宿場です、旅人や人の往来が無くなり、産業も少ないことから開発されずに残されました。昭和56年(1981)国重要伝統的建造物群保存地区に選定されました。水路は元中央を流れていました。平成元年(1989)に電柱を無くして移設し、舗装道路を取り払ったことから平成18年(2006)には観光客が100万人突破しています。峠には、一里塚や茶店跡、石畳があります。

下野街道(会津西街道)の氷玉峠にある石畳



塔のへつり

南会津郡下郷町の塔のへつりは、約2,800万年前から100万年前に出来た地層で、へつりとは切り立った崖が続く奇岩を意味し、阿賀川で浸食された洞窟状の空間が連続しています。へつり内は浄土を思わせる空間があり、虚空蔵菩薩が祀られています。大川羽鳥県立自然公園内にあり、昭和18年(1943)には河食地形の特異例として国天然記念物に指定されました。

